

The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

終幕までの行進曲 I

作成レギュレーション

基本概要

- ・ 経験点：190000 点
- ・ 資金：350000G
- ・ 名誉点：2000 点
- ・ 成長回数：324 回
- ・ マジテックトームストーン：戦記 2500 個以上、詩学 1350 個
- ・ アイテムレベル制限：武器ランク S 以上／防具ランク S 以上

制限事項

- ・ 放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・ バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限
- ・ シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・ 戦利品判定は振る

その他注意事項

- ・ レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・ 成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

導入 ～終幕までの行進曲 Part 1～

君達は、再びシンファクシ家に戻っていた。

というのも、エクセリアからたたき出されたというか…

エクセリア

『わっり、ちょっとお前らいるのは作業が捗らねえからシンファクシ家で暇を潰してくれないか？』

この言葉で、渋々シンファクシ家に出向していたと言うべきだろう。

で、今は何をしているのだろうか。

(※GMメモ：RP待機)

トーレス

「チェック」

(※GMメモ：RP待機)

知恵ある者は、トーレスとのチェスで大敗を喫している。

龍姫公

「くっ…流石にリハビリにでは堪えるな…！」

(※GMメモ：RP待機)

力ある者は、龍姫公のリハビリ戦闘に付き合っていて。

まあ、戦時中とは思えないほどに暇だった。

そんな折、君達の元にセレネが訪れる。

(※GMメモ：RP待機)

セレネ

「あ、ああ、久しぶり。エクセリアが、蘆田との会談の結果、ある場所に君達を送り込むことが決定したよ。その時には、龍姫公もついていくことが、条件となっているよ」

と言って、セレネは地図を広げる。

セレネが指し示した、山門山の一带。蒼瑠谷高地と書かれた場所に、丸が描かれていることが分かる。

そこに、一体何があるというのだろうか。

(※GMメモ：RP待機)

セレネ

「…それと。蘆田からの依頼だ。

ヴァルマーレの要人、西門寺紅弘（さいもんじくれひろ）の救出を頼むという。彼が囚われている場所は、等護の北方にある監獄、アルフレイアだ。

君達には先に、要人救出を頼みたい、と、私の表が言っていたよ」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、セレネの指示通りに要人救出のためにその場を後にすることになる。

向かう場所は、神道衛士団本部。

要人を救え

君達は、神道衛士団本部に向かった。そこに、蘆田が立っている。

蘆田

「お前達、来てくれたのか！助かるぞ。…さて、早速だが本題に入ろう。

我々の目的は、アルフレイア監獄に囚われた財務大臣、西門寺紅弘の救出だ。彼は無罪の罪を着せられ、決闘裁判に打ち勝ったのだが…それを快く思わない『スイショウ団』という暴力団により拉致され、片腕を切り落とされた状態でアルフレイア監獄に囚われているという。そこには、死刑執行用の機材もあるということだ…。

頼む。彼の救出を手伝ってはくれないか？」

(※GMメモ：RP待機)

君達の答えに対し、蘆田は喜んだように君達を見る。

(※GMメモ：RP待機)

蘆田

「ああ。頼んだぞ。私は前線で暴れ、お前達が入り込む隙を作る。お前達は隠れ家に戻り、イリヤと遊星に声をかけてくれないか？」

蘆田は君達にそう指示すると、背負った大剣を研ぎ始める。

これ以上話してはくれなさそうだ。

(※GMメモ：RP待機)

隠れ家での協力要請

君達は、隠れ家に戻り、イリヤに話しかけた。

イリヤ

「なに？紅弘が囚われた？…そう、なら、私も行くしかないね」

そう言って、イリヤは悩んだように腕を組む。

イリヤ

「…でも、遊星は今、隠れ家の補修作業の手伝いをしているよ。だから、他に腕のある冒険者を誘った方がいいんじゃないの？」

(※GMメモ：RP待機)

????

「俺を連れて行け」

そこに、雷を纏った男が現れる。無名の王だ。

(※GMメモ：RP待機)

無名の王

「ここ最近は竜狩りの手伝いもしているが、要人救出について興味がないわけではない。嘗て成し得なかったこと…、挑戦をさせてはくれないか？」

(※GMメモ：RP待機)

無名の王という、強力な助っ人の手を借りる事が出来そうだ。
そこに、遊星が現れる。

PC への選択肢

・あ、ポップした

・湧き潰ししなきゃ…

(※GMメモ：RP待機)

遊星

「なぁ俺へのあたりが酷すぎる気がするのだが。どう考えるんだ、無名の王？」

無名の王

「…普段から会わない人間に湧き潰しの単語をぶつけるのは阿呆の一言に限るぞ。

それ言ったら、俺も湧き潰しの単語をぶつけられかねないほどに出没率低いだろう？」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、無名の王は笑う。

アルフレイア監獄

君達は、アルフレイア監獄に向かった。

無名の王

「…蘆田、どうする？前線は青い制服の男たちが並んでいるぞ？」

蘆田

「なに心配は要らんよ。今頃《彼女》が、暴れている頃だろう」

そう言って、観察を続けていると、やけに監獄が騒がしくなる。

戦闘の音だ。

(※GMメモ：RP待機)

蘆田

「《彼女》が水晶団に攻撃を開始したようだ。

無名の王、お前は彼らについていってくれ。私は、《彼女》たちが形成した戦線に向かいこれを援護する」

そう言って、影のように早く走り抜けるだろう。

イリヤも、影身を顕現させ、準備を整える。

イリヤ

「私も、蘆田の元に行く。君達は、無名の王と共に西園寺を救出してね」

P1：突入フェーズ

無名の王

「やはり、指定暴力団の『水晶団』に、この監獄は占拠されているようだな…。

気を付けろ…『水晶団』ということは、ミヒヤエルだ。そいつと、そいつ配下の兵が潜んでいるはずだ。

冒険者、先導は俺がやる。ついてきてくれ」

進んでいくと、水晶団の兵士たちが無名の王に攻撃を開始する。

水晶団兵士

「来たな、大罪人！」

「今ここでその首を掻き切ってやる！」

敵：水晶団兵士×4

君達は、水晶団兵士を斬り捨てた。

先に進むと、謎の青いフィールドで拘束された、西園寺の姿があった。

(※GMメモ：RP待機)

紅弘

「ぐっ…お前達は…暗魂の…。来てくれた…のか…」

(※GMメモ：RP待機)

それを見つける頃に、蘆田が合流する。

蘆田

「前線の敵は片付けた。西園寺…ここにいたのか…！にしても、魔動フィールドとは考えているな…！」

(※GMメモ：RP待機)

蘆田

「彼は、魔動装置によって拘束されている。無理矢理に破壊すれば、何が起こるか…」

無名の王

「機械のことはよく分らんが…拘束しているということは、鍵があるはずだろう？手分けして、奴らを探すとしよう」

と言って、搜索を促す無名の王。しかし…

????

「その必要はありませんよ」

という声が聞こえ、無名の王がそれに目を向け、その正体を叫ぶ。

無名の王

「ユユハセ…！」

ユユハセ

「個人的な怨みはありませんが、これも仕事でしてね。私達家族が、貧困から這い上がり生き残るためには、汚れ仕事であっても、貴重なんです。

大丈夫…苦しみはしません。錬金術師ギルド特製の『毒霧』で、安らかに冥府に旅だってください…」

(※GMメモ：RP待機)

P2：搜索フェーズ

ユユハセ

「あまり、見苦しい真似はなさらぬことです。それではご機嫌よう…」

そう言って、彼はその場を後にするだろう。

無名の王

「古典的な真似をする…！ええい、離れている！雷の槍でぶち抜く！」

絶大な威力を持った雷の槍が、鉄柵を一瞬にして破壊する。

無名の王

「毒素を好む魔物だ！気を付けろ…！」

敵：ポイズンジャム×3

ポイズンジャムは優先的に、西園寺紅弘（自軍後方エリア）を攻撃します。

敗北条件：西園寺紅弘の HP0 以下

西園寺紅弘の HP は 300 として扱います。

君達はポイズンジャムを撃破したが、毒霧の発生が続いている。

蘆田

「根源を破壊しなければ、毒霧は止まらないか…！俺が紅弘の応急手当をする！毒霧の根源の排除と、認証鍵の入手を頼む！」

そう言い、蘆田は後退する。

紅弘

「水晶団の兵士が…、この装置を解く鍵を…持っているはずだ…」

探索判定 目標値：33

成功時、「毒霧噴霧器」とエンカウントする。

失敗時、「ポイズンジャム」とエンカウントする。

エンカウントは、各キャラの成功失敗を総合して判定されるが、複数人成功している場合は、先に成功した PC がエンカウントし、後に成功した者にエンカウントした存在がいなかったことにする。

君達は、毒霧噴霧器を破壊した。

無名の王

「毒霧噴霧器は破壊した！」

蘆田

「よし、毒霧が晴れたぞ！次は認証鍵を探せ！」

探索判定 目標値：33

成功時、「水晶団兵士（鍵持ち）」とエンカウントする。

失敗時、「水晶団兵士」とエンカウントする。

エンカウントは、各キャラの成功失敗を総合して判定されるが、複数人成功している場合は、先に成功した PC がエンカウントし、後に成功した者にエンカウントした存在がいなかったことにする。

君達は、『魔動装置の認証鍵』を入手した。

イリヤ

「水晶団の本隊が来る！気をつけて！」

(※GMメモ：RP 待機)

解除（スカウト技巧）判定 目標値：31

マギテック技能を併せ持つと、判定基準値に+2 のボーナスを得る。

君達は、魔動フィールドなどを解除した。

紅弘

「すまない、助かった…。ゴホッ…ゴホッ…」

蘆田

「無理はするなよ、紅弘。…お客さんだ」

(※GMメモ：RP 待機)

君達は後ろを見る。

ミヒヤエル

「流石は暗魂の冒険者。小細工では始末できぬか…」

無名の王

「ミヒヤエル…！」

(※GMメモ：RP待機)

ミヒヤエル

「我が道を征かんとするならば、やはり自らの手で、障害を打ち払わねばならんか…。
仕方あるまい…」

剣を構え、ミヒヤエルが吼える。

ミヒヤエル

「来い、暗い魂の残滓共！今ここで、その灯火を消し去ってくれる！」

敵：壊剣のミヒヤエル、金眼のユユハセ、左党のローレンティス、水晶団兵士×2

君達は、水晶団を退けた。

ミヒヤエル

「ここまできて、悪あがきを…！」

(※GMメモ：RP待機)

君達の投降勧告に対し、ミヒヤエルは嗤う。

ミヒヤエル

「投降だと？暗い魂を継いだ罪人がよく言う！投降すべきは、そちらの方ではないか！」

無名の王

「さて、そもそも彼らは暗い魂を『継承』したのだろうか…」

無名の王が挑発する。

ミヒヤエル

「老害が…。貴様も、気付いているのだろう！《暗魂の暁》は、貴様の『特異な力』を利用した！故郷を奪還したいと願う、俺達の想いも、貴様の力も、結局は誰かの思惑に組み込まれ、利用され…自由に戦うことすら許されないッ！

それでは救えない！俺達の祖国を救えんのだッ！俺は必ず東ディスエリィアを取り戻してみせる…どんな手を使ってでもな！」

そう言って、ミヒヤエルは閃光弾を地面に投げる。

光がやみ、君達が逃げる彼らの後ろ姿を捉えると、彼はにやりと嗤い、逃げていった。

(※GMメモ：RP待機)

追撃を使用とする君達を、無名の王は止める。

紅弘の対処をしろと、無名の王は促した。

紅弘

「恩に着るぞ、暗魂の冒険者…」

(※GMメモ：RP待機)

紅弘

「元より、あらぬ罪で囚われていただけだ。お前達にそう言われるならば、より一層、奮起できよう。それにしてもミヒヤエルめ…、この残った腕を、七獄の魔王に捧げてでも、奴だけは血祭りに上げてくれる…！」

蘆田

「憎悪に駆られるのはよせ。ヒトを捨てたいわけではないのだろう？」

紅弘

「ああ…」

そのような話をしつつ、脱出をした。

脱出後

君達は、アルフレィア監獄から脱出した。

無名の王

「見ての通り、救出は成功した。イリヤ、外の状況は？」

イリヤ

「警備に立っていた水晶団の兵士達は始末したよ。」

…けれど、その後は人っ子一人、現れてないね」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、イリヤの発言から、別の抜け道の可能性に行き当たるだろう。
無名の王は、イリヤに幹部級の搜索を伝えつつ、振り返る。

無名の王

「さて、帰るぞ。この場に残る意味はない…」

(※GMメモ：RP待機)

そこへ、不審な男が現れる。

(※GMメモ：RP待機)

謎の使者

「…《暗魂の暁》と無名の王、蘆田大臣に紅弘幕僚長とお見受けします」

無名の王

「誰だ貴様は…！」

(※GMメモ：RP待機)

謎の使者

「どうか武器をお収めください。私は、さる御方に仕える者…。我が主は、貴方様がたの敵ではございません。既に、《暗魂の暁》のエクセリア嬢と連絡もっております。紅弘幕僚長の身の安全のためにも、まずは《白樺澄基地》へ…。

決して罠ではございません故、ご安心を…。紅弘幕僚長はこちらに…。

人目を避けるため、馬車を用意してございます」

そう言って、謎の使者は深々と礼をして立ち去るだろう。

それを追うように、呼ばれた紅弘に、無名の王もついていく。

(※GMメモ：RP待機)

白樺澄基地にて

君達は、白樺澄基地に辿り着いた。

その基地内の一室に案内され、君達は本を読むエクセリアを見る。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…話は聞いている。紅弘を、救ったんだな」

面倒くさそうな表情を浮かべながら、君達を見るエクセリア。

????

「皆様を、ここにお呼びさせていただいたのは、このワタクシよ」

そう言ってくる彼女は、光羽が見えていることから、ヴァルキリーであるようだった。

エデルトルート

「お初にお目にかかる方もいらっしゃいますね。ワタクシは、古より続くアウェア家の血筋にして、監視を司るヴェヒターの家督たる者、エデルトルートよ」

(※GMメモ：RP待機)

見識（セージ知識）判定 目標値：31

成功時、「ヴェヒター」がアウェア家の傍流であることを知っていることになる。

エデルトルート

「ここに呼び立てたのは、エクセリアの後継に関わる事情が絡みます。

そのためにも、紅弘幕僚長を救ってもらわなければならなかった」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「知っての通り、私は不老不死に近い状態とはいえ、力の衰えは発生している状態だ。

セリーヌを産んでから、私も無理はできなくなった。今に至っては、為政者としても活動している。それ故に私は、早いところ後継者を指名しなければならないわけだ」

エデルトルート

「エクセリアは王位を継承してから長らく、その座を誰にも譲りはしなかった。その理由がなんなのか、分かりますね？」

君達は、その理由について考えようとするだろう。

シンキングタイムだ。

(※GMメモ：RP待機)

冒険者+知力B判定 目標値：33

(※GMメモ：きっちりと考えたRP待機)

(※GMメモ：的外れな発言をした場合 ここから)

エクセリア

「…何を言っているんだ、こいつは…」

(※GMメモ：的外れな発言をした場合 ここまで)

エクセリア

「…伴侶がいなかったから、後継者を産むことさえもままならなかった、ということだ」

エデルトルート

「そして今、長らく放置していた後継者問題が噴出している。エクセリアが、セリーヌという娘を設けたことで、ね。穏健派のブランドシュッツが手を回しているので、外野の人間が介入することはないでしょうが…エクセリアの叔父から派生した家系、すなわち内野が黙っていないのです」

(※GMメモ：RP待機)

エデルトルート

「その家系の名は、イングラム。アゼルマレムやマクルーゼではなく、ルクバミーナの
ある国で暗躍をしていると聞きます。現当主のアリヒロ・イングラム・ヘルツォーク・ア
ウエアは、アウエア家の伝統である女性優位を崩そうとしていると聞きます。

真に王となるべきは男であり、女の王権はあってはならないと」

そう言って、エデルトルートはアウエア家の現在を語る。

(※GMメモ：RP待機)

しかし、君達は…3年前にエクセリアから聞いた内容を思い出すだろう。

エクセリア

『アウエア家には4つの家系があつてな…。聖王の家系『シャルロッテ・クレア』、守衛
の家系『ブランドシュッツ』、監視の家系『ヴェヒター』、そして無名の外様だ。

無名の外様についてはそこまで情報を仕入れているわけではないが、いずれも強固な魂
を持つ人々が築き上げているというよ』

それを引き合いに出し、君達はエデルトルートに話すことになるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…イングラム家系は、『ある大罪』により追放された叔父が成立させた、本流の我々に
とって偽りの家系だ。しかし、彼の家系からも、ノーブルヴァルキリーが誕生していると
聞く。…そこから、現当主のアリヒロが何をしているか…私には容易に想像がついてしま
うのが悩みどころか…」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、エクセリアは頭を抱える。古代から生き残ってきた、アウエア家特有の悩
みのだろう。たったひとつの伝承が、世界に深い傷痕を残しているのだから。

エデルトルート

「アウエア家の伝統に従う我々と、伝統の転覆を狙うイングラム家系。

命運を分ける戦いは、既に目前に迫っているのです」

そのとき、こんこん、と扉を叩く音がする。

エクセリア

「入れ」

扉を開くと、そこにはセリーヌとリリアーナ、そして…見窄らしい恰好の少女がいた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「セリーヌ…。お前、その子はどうした！？」

(※GMメモ：RP待機)

セリーヌ

「龍姫公が保護してきて…！お母さんに話を通せば、大まかな事情は分かるだろうって言うてて…！」

保護された少女

エクセリアは、一度目を閉じ、そして開く。その瞳孔が青く染まると、その少女の存在定義を見抜く。

エクセリア

「お前…イングラム家系の者だな？どうしてここに逃げ込んできた？」

セリーヌ

「お母さん！？」

(※GMメモ：RP待機)

エデルトルート

「既に計略は始まっている、と言うのですか？」

エクセリア

「恐らくは…」

そのように言って、エクセリアはその少女を深く観察する。

セリーヌより年齢は高いだろう、おそらくは 9 歳とかそんなものの年齢。

動揺のあまり、光羽が出ていることから、ヴァルキリーであることも確定的。

ノーブルヴァルキリーであるかどうかは、正直なところ判然としない。

この年齢の少女でありながら、嫌になるほど虐げられたような傷痕が見える。

…その証拠に、彼女の腹には、小さな魂が宿っていた。

(※GM メモ : RP 待機)

エクセリア

「お嬢さん。名前は？」

見窄らしい恰好の少女

「……………」

質問に答えない少女。

(※GM メモ : RP 待機)

見窄らしい恰好の少女

「……………」

君達の問いかけに対しても、やはり答えない。

PC への選択肢

- ・ 名前という概念が分からない？
- ・ もしかして捨て子なのでは？

(※GM メモ : RP 待機)

君達の疑念を聞いたエクセリアは、発想を変えて訊く。

エクセリア

「君は、なんて呼ばれていた？」

そう言って、エクセリアは彼女に訊く。彼女は、エクセリアにだけその名を明かした。

それを聞き、エクセリアはしばらく考える。その名前が、あまりにも、名前として成立させるには馬鹿馬鹿しい名前だったからだ。

エクセリア

「…分かった。お嬢さん、君が真の名前を思い出すまで…アリスと名乗っていなさい。

私は、それ以上のことを求めないから」

(※GMメモ：RP待機)

「アリス」とセリーヌ

アリスとセリーヌが部屋から出て行ったのを見て、エクセリアは改めて口を開く。

エクセリア

「彼女は…恐らく、イングラム家系の手の者だ。奴らは、本気でアウェア家の伝統をひっくり返そうとしているみたいだ」

そう言って、エクセリアは少女が持って来ていた紙に記された連絡先に、通話の耳飾りで通話を試みる。

(※GMメモ：RP待機)

????

『もしもおし？ああ、聖王だよね？』

エクセリア

「…アリヒ口。子を孕ませた状態の女子を送りつけてくると言うのは、どういう了見でそれを実行に移した？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアの目が細くなる。何やら、通話先の相手…アリヒ口は、不遜極まる発言をしているようだ。

エクセリア

「貴様らを、アウェア家の一員だと認めたつもりはない！追放された叔父の家系であるといえど、幼子に胤を注ぎ込むバカがいるか！

お前のような男が、アウェア家の当主になることは、過去の例を鑑みても許されるはずがない！即刻、アウェアを名乗ることをやめろ！この恥知らず！」

ぶつつ、と通話を切る。しかし切って秒で、彼は連絡をしてくる。

アリヒロ

『そちらの冒険者に、話があるんだよねえ。激情に任せて切って欲しくなかったなあ』

そう言って、アリヒロはエクセリアに通話の耳飾りをスピーカーモードにすることを要求する。

アリヒロ

『君達のことは訊いている。なんでも、律を排した冒険者らしいじゃないか』

(※GMメモ：RP待機)

アリヒロ

『だったら、話が早い。今すぐ、僕の側についてほしいな。その聖王は独裁者だ、民意なんて象徴程度に考えているほどの下郎だろうよ。すぐキレて通話を切るくらいだしね。

それとも？僕が賣す『野生の律』は嫌かい？人は本能に従って個を増やせばいい。そこに法や自我なんていう観念はいらないんだ』

(※GMメモ：RP待機)

アリヒロ

『そっか。残念』

そう言って、アリヒロは通話を切るだろう。

エクセリアは少し黙った後に、君達に向き直る。

エクセリア

「…分かったとは思いますが、これが今の私の、胃痛の種だ。もうさっさと、こいつとペアになっている通話の耳飾りを破棄することにする。こいつと関わっていると、どうにも怒りを抑えられそうにないからな…。

君達は先に、ヴァルマーレに行っていてくれないか？私は少し頭を冷やしてから行く」

そう言って、エクセリアは再び椅子に座る。

手紙の表題には、交易共通語で「恐れ、怖れ、妬み、憎しみ。人は弱く、相互理解など永劫にあり得ず、戦争は無窮の彼方まで続いていく」と書かれていた。

そして、送り主の用件はただひとつ。

「不要物（ジネ）を王位継承権第一位にしろ」であった。

もちろん、公平さを考えれば、王位継承権第二位に据えるべき人材ではあるのだろう、セリーヌが拾ってきた少女は。しかし、エクセリアはこれを認めることは、先祖達の遺志に背くとして、徹底して拒否する構えを見せることにした。

冒険者たちの決断

君達は、先んじてヴァルマーレに戻っていた。

(※GMメモ：RP待機)

リリアーナ

「邪竜の眷族に動きあり、だってさ。すぐに、シンファクシ家に向かおう」

通話を終えたリリアーナが、そういう。

(※GMメモ：RP待機)

シンファクシ家の屋敷に戻ってきた君達は、中で頭を抱えるトーレスの姿を目にする事になる。

トーレス

「よく駆けつけてくれた。既に聞いているとは思いますが、邪竜の眷族に動きがあったのだ」
エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「暗魂の冒険者がた、そしてリリアーナ嬢。急に呼び戻す形になってすまない。緊急事態故、手短に済ませるぞ」

(※GMメモ：RP待機)

マルセル

「《占星台》より、邪竜の眷族に動きありと、警鐘が発せられてな。

これを受け宮内庁は、臨戦態勢への移行を命じたのだ」

クリストフ

「その命を聞き、嗜好きの貴族達に聞いて回ったのですが…、山門山の空を覆い尽くさんばかりの竜の群れを、西の方に向かった獵師達が目撃したそうです」

(※GMメモ：RP待機)

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「…うむ。さらに、それら邪竜の眷族は、『七大天竜』の一翼、『帝竜ニーズヘッグ』の眷族である邪竜『フェルニゲシュ』の眷族であると聞く。

貴殿らを、我らの戦争に巻き込むわけにはいかん。客人として招くと言っておきながら申し訳ないが、場合によっては、帝都からの避難を願うことになるだろう。《暗魂の暁》の皆様には、待避先を含めて、今後の身の振り方を考えてもらわねばならん。

すまぬが、早急に結論を出していただけるかな？」

(※GMメモ：RP待機)

報酬

基本要素

- ・経験点：10000 点
- ・資金：2500G
- ・名誉点：なし
- ・成長回数：9 回

マジテックトームストーン

- ・詩学：150 個